

平成 27 年 3 月 30 日

出口正之

学融合研究事業・萌芽的研究会
「文理学術基盤に関する萌芽的研究会」
報告書

(1) 参加者一覧

出口正之 比較文化学専攻 教授 deguchi@idc.minpaku.ac.jp
中村敏和 機能分子科学専攻 准教授 Toshikazu NAKAMURA<t-nk@ims.ac.jp>;
田村義保 統計科学専攻 教授 tamura@ism.ac.jp<tamura@ism.ac.jp>;
塚原直樹 学融合推進センター助教 Yoshiyasu Tamura<tamura@ism.ac.jp>;
平田光司 学融合推進センター教授 Kohji HIRATA<hirata@soken.ac.jp>;
小林登志生 総研大名誉教授 tashakobayashi@yahoo.co.jp
西村祐子 駒澤大学教授 yukonb1b2@gmail.com<yukonb1b2@gmail.com>;
島村真佐利 非営利法人研究学会 <shimamura@koueki.co.jp>;
渡辺 元 立教大学大学院客員教授
gwatanabe@rikkyo.ac.jp<gwatanabe@rikkyo.ac.jp>;
星 さとる パブリック・ベネフィット研究所 所長 星さとる
<publicbenefit@kke.biglobe.ne.jp>;

(2) 議論の概要

- ① 予め参加者に撮影の許可と広報上その他の利用の許可を得た。
- ② 公益法人制度改革について学会誌が、どの程度扱っているか調べたところ、研究対象として扱っている学会誌は非常に少ない一方、自然科学系の雑誌の多くで、巻頭言等のコラムで取り扱われていることが判明した（38 件）。
- ③ 「学術の動向」誌においては二度において特集がなされていた。同誌に掲載された内閣府発表の数字によれば、学協会で一般社団法人 111、一般財団法人 9、公益社団法人 100 公益財団法人 8 である。
- ④ 学会は、ギルド的な同業者の技能向上の場であったものが、現在では、間接的には科研費の配分や大学評価等にまで影響を与える論文の評価機関としての機能を持つなど公的な存在へと変化してきている。
- ⑤ 学協会はこれまで相互に十分な交流がなくその運営方法、査読の方法、オーサーシップの習慣など、一つの学会では許されても別の学会では許されない事項などあれば、その間の学際研究は研究倫理問題に必然的に直面することになる。
- ⑥ 事例報告として、3 学会が報告された。A 学会は中小規模の学際学会であるが、ドレスコードや使用言語などについてもディシプリン間での文化の装置が顕著である。

- ⑦学協会の法人化をスケジュール化して検討しているが、財務など会計事務の問題に直面している状況が明らかになった。
- ⑧任意団体の学協会もあるが、任意団体だからと言って、法令上の要請に応えないということはありえず、マイナンバー制度の導入などにより、学協会の組織運営に今後厳しい目が向けられる可能性が指摘された。
- ⑧多くの研究者にそれぞれに何らかの接点があるものの、相互に熟知しているものが少ないという現状が明らかになった。
- ⑨学協会研究の切り口として以下のような考え方が示された。
 - 1. 分野別分類 物理系、化学系… 社会科学系、人文科学系…学際系
 - 2. 規模別分類
 - 3. 機能別分類 論文誌の発行、査読、学術講演会・研究発表会、Authorship、倫理規定などのルールメイク、表彰、(認定医などの) 資格付与。
 - 4. 法人格別分類 公益社団法人、公益財団法人、一般社団法人、一般財団法人、NPO法人、任意団体(法人格なし)

(3) 当センターが行う「グローバル共同研究」事業や「学融合共同研究」事業への申請への展望

- ① 研究の意義については、大きな反響があった。具体的な研究方法としては、学協会をいくつかに分類し、その中で分野別の研究を行う手法や事例をたくさん收拾する方法などが検討された。
- ② 学協会を研究するグループが誕生したということを示すだけで意義があるという意見もあった。
- ③ 海外の学会や国際学会も研究の対象とすることで、「学融合共同研究」としての意義が出てくるという意見もあった。他方で米国は世界そのものであり、米国の学会は比較にならないのではないかという意見もあった。
- ④ 大学法人化後、急速に研究倫理上の問題を研究者が承知しておくことが必要になり、教育にも盛り込まれるようになったが、学会についても同様のことが起こり、教育にも活用するために、予め研究していくべきではないかという意見も出てきた。
- ⑤ 「学融合共同研究」事業についての申請については、文理研究者が誰でも参加できる利点があるので、諸課題を予め整理したうえで引き続き検討していくべきではないかという方向性が示された。

以上